

田中さんのジレンマ

「お父さん、痛いよおー!」

痛み止めの薬がきれる頃になると、毎晩決まったように悲痛な叫び声が病室に響きわたる。田中さんの息子の一郎君は、数年前から小児性の特殊なガンに苦しんでいる。痛みがひどく、病院では痛み止めの注射をする以外手のほどこしようがない。

担当の医者は、

「このままでは死をまっばかりです。しかし、ある薬を飲めば助かるかもしれません。それ以外に助かる方法はありません。」と言った。

その薬は、最近ある薬屋さんが発見したもので、100万円かけて作って、1000万円で売っているというものだった。

それを知った田中さんは、次の日から、その薬を買うため、友人、知人、その他可能な限り手をのばしてお金を借りに回った。

しかし、いくら頑張ってもその値段の半分のお金しか集まらなかった。

そこで、田中さんは薬屋さんにわけを話し、もっと安くしてくれないか、それもダメなら後払いにしてはくれないかと頼んだ。

しかし、何度頼んでも、薬屋さんは、

「ダメだよ。私がその薬を見つけだし、それでお金もうけをするつもりなんだからね。」とはっきり断った。

困り果て、思いつめた田中さんは、その夜、愛する息子を助けるために、薬屋さんの倉庫に入り、薬を盗んだ。